

したしみを向けるゆとり

津守 真

夏休みのあと、久しぶりであの子と出会うのが待ち遠しい。毎日子どもとの生活の中に巻きこまれているときと違って、一步退いたゆとりをもって子どもと出会うことができる。休むことによって、私も本来の自分を取りもどし、常よりも透き通った眼で見られるような気がする。子どもも、久しぶりで学校にくる新鮮な気持があるのだろう。

二学期の最初の日、S夫はいつものように校長室に私をさがしにきた。私の手をひいて学校中をひとまわり歩き、以前と同じかどうか調べてまわった後、彼の好きな裏庭のぶらんこに腰をおろし、自分でこぎはじめた。いつもだと私は後にまわって背中を押すのだが、この日はS夫は押すことを私に要求もせず、私も後にまわる気も起こさずに傍にゆっ

くりと腰をおろした。自分でこぎながら、S夫は私の顔をみてにこやかに笑う。私にもしたしみを向けるゆとりがあった。

朝がたから激しく降っていた雨が上がり、空の向こうのはしが明かくなっていた。私がおわきにいるだけで、S夫はいろいろのこぎ方でぶらんこに乗った。快いひとときだった。

この子が私とこの裏庭のぶらんこをこいだ最初は、一年ほど前、当時幼稚園に通っていたS夫を、父親が急に入院したために母親が一日だけ連れてきたときだった。顔にしわを寄せて、何か深刻な面持ちをしたS夫と、私はほとんど一日中ぶらんこでつき合った。私も緊迫した気分で、何とかこの子の味方になればと思つて時を過ごしたのだった。きょうのS夫は違う。同じぶらんこでのびやかな表情でこいでいる。それには、この一学期、この子どもにびったりと寄り添つて過ごしたO先生との日でもある。

この快い時間を過ごせたのは、私の側にもしたしみを向けられるゆとりがあり、子どもにも開けた心があったからだろう。

この日、私は急ぎの書類があつて、校長室で机の前にしばらく坐っていた。今年の四月に新しく入学したU夫が、実習生と校長室にきて、後で大声を出した。これは私が机に向かつていることと関係があるように思えて私は椅子の向きをかえてU夫を見た。彼はチェアをしばり出そうとして蓋がとれず大声を立てていた。ふたをとってあげようかと私が

一言いうと、U夫はすぐに私の机にチューブを持ってきた。ことばをもたないこの子どもが、私の一言に応じたことに驚いた。それはボンドのチューブで、蓋は固く付着していて私にもとれなかった。U夫はなおもそれを試しているうちに、チューブが破れてボンドがはみ出してきた。U夫はべとべとのボンドを指で絵本に塗りつけた後、流しに手を洗いにいった。彼は一学期からチューブをしぼり出すことに執着していた。それも糊やボンドが多い。しばしば激しく大声をあげていたU夫と、担任のI先生が丁寧につき合って過ごしていた。この日、私の一言にこの子どもが応じたのは、この一学期の間に、I先生との間で、気持ち整理されてきたのだろうと思う。

私がU夫の手助けになればと思っかけてかけた一言が彼の心に残っていたのだろう。午後になって、私は別の子どもに要求されて、庭の固定遊具に梯子をかけていたとき、U夫はその梯子を彼の気に入る場所にかけてくれと私を呼び、身振りで示した。二人の子どもはそれぞれ別の場所に梯子をかけてもらいたくて、思い通りにゆかないとU夫は激しく声を立て私の腕をきつく掴んだ。私はことばで説明しながら、梯子をあちらにかけたりこちらにかけたりした。U夫は自分の要求を理解されたと感じたらしく、そうなるもはや大声を出さず、じきに梯子から離れて別の遊びへと向かった。

担任のI先生は、U夫がこんなに糊のチューブをしぼり出すのは、この子がべとべとの付着に関心をもっており、人間関係でも、べったりとくっつく体験をもっと必要としていると考えていた。U夫はいくらとめても結局はやってしまうのだが、仕方がないと思っ

やらせておくのと、こちらからそうしたい気持ちに関心を向けて、大人とのかかわりの中でそれをやるのとは大きな違いがあるとI先生は私に語った。私もこの点は重要だと思う。子どもは同じようにしていると見えても、そこに向けられている大人の気持ちや考えによって、その同じことが子どもにとってまるで違った意味をもつ。

この二人の子どもにとって私は脇役としての存在である。学校の中でもっと深くかかわっている大人がいる。いずれの子どもも、その大人との間で、心の混乱が整理され、いまや脇役である大人にも、したしみを向けるようになっていく。その子どもの心にこたえるだけのゆとりが、脇役である大人にもできたとき、子どもは社会的にひろがっていく。だが子どもと身を入れて深くかかわることと、そして、心が開かれた人たちがまわりにいることと、両方があって、子どもの世界は開かれる。

夏休みの終りころ、御殿場コロニーのセミナーで、最首悟さんがご自分のダウンズ症の子どもさんのことから、人間の負う不条理について語られた。私はそのことについて考えていた。

障害の子どもを望んで生んだ親はおそらくいないだろう。子どもが生まれたときに、大きくならなかったら養護学校に入れたいと思っていた親もいないにちがいない。子どもは何も言わないが、やはり自分が望んで障害を負ったのではないだろう。私の学校にはそういう親



子が集まっている。先生たちも、そして私も、最初からこういう学校の先生になることを夢みていたのではない。ところが実際にその中に身をおいてみると、そこには人生の真実にふれるものがある。それは、この子どもたちの存在が、私どもが好むと否とにかかわらず、この世の中の不可避な現実であることに根ざしているように思われる。不条理である現実をそのままに肯定して、その中で生きはじめると、不思議なことにそこに光が射してくる。

不条理の現実はこの子たちの存在の問題に限らない。病気でも、災害でも、個人的運命でも、望まないのに負わねばならない不条理の状況は人間につきまとう。

それを負うというからには、負う主体がある。主体である私が、それをどう負うかが、不条理の中にある人間に問われているのではないだろうか。負わされている状況の中に閉じこめられているときには人の心にゆとりがない。だが、それをどう負うかは、主体の自由委ねられている。不条理を明かるく負っている親子をみると、真の自己は、それを負って生きる主体にこそ見出されるのではないかと思う。

状況に閉じこめられる自分と、それを負う主体である自分と、この両者は実際には判然と分けられるものではない。ことに肉体的、精神的に疲労の中にいるとき、「自分」はその中から脱け出すことはむずかしい。そのただ中にある親子に接するときには、そこから一歩はなれてなどとは到底いうことができない。そういうときにはどうしたらいいのだろうか。

ゆとりをもって子どもをみられるときというのは、いつも当然のこととしてあるのではない。それは、あるとき、恵みとして私共に与えられる。

(愛育養護学校)